原著論文

災後・災間におけるコミュニティ放送による記憶の継承

Passing on Memories through Community Broadcasting in Post-disaster and Inter-disaster Periods

キーワード：
　コミュニティ放送，集合的記憶，災後，災害文化，記憶の継承
keyword：
　community broadcasting, collective memory, post-disaster, culture of disaster, memory inheritance

情報科学芸術大学院大学　金　山　智　子
Institute of Advanced Media Arts and Sciences　Tomoko KANAYAMA

要　約
　本研究では，災害が繰り返される社会において，災後・災間にコミュニティ放送がどのように災害の記憶の継承を意識し，実践しているかについて明らかにする。災害発生から復興までの一連の捉え方に，災後・災間の視点を新たに加えることで，コミュニティ放送の役割を災害文化継承の観点から再考することを試みた。1995年からの23年間に発生した７つの大規模災害被災地を対象に，24のコミュニティ放送局にインタビュー調査を実施した。結果，コミュニティ放送局は災害発生時から災害の記憶の継承について意識的であり，放送活動を通した継承が行われていることが明らかになった。一方，時間経過に伴い，災害の記憶の捉え方は変容しており，番組や活動の中で記憶の構築・再構築を交えながら，その時々のコミュニティに向けた伝え方をしていることが考察された。コミュニティ放送局の実践は，（１）語り継ぎ，（２）次世代への伝え方，（３）災害の記憶のアップデートという三点において特徴的であり，これらの実践は，災害経験が社会的な行動や規範となる，いわゆる災害文化の継承につながっていることも知見として得られた。本研究では，先行研究で復興後を平常と捉え，コミュニティ放送も平常放送に戻るという一般的な認識に対し，災後・災間という視点により，災害の集合的記憶に関する内容が変容しながらも，継続的に放送されていることを可視化し，コミュニティ放送を災後放送と位置付ける意義を示唆した。

原稿受付：2020年７月３日
掲載決定：2020年９月11日

Abstract

The purpose of this study is to explore how community broadcasters are aware of passing on memories of disaster and how they practice this through broadcasting in a society where disasters repeatedly occur. Also, it reconsiders the role of community broadcasting by adding new post-disaster and inter-disaster perspective to way of understanding disaster that focuses on the series of events from the disaster's occurrence to the affected area's recovery. Twenty-four community broadcasters were interviewed in seven major disaster-affected areas over a 23-year period from 1995. The results indicated that the community broadcasters were consciously passing on memories of disasters starting from the time these disasters occurred and have been engaged in this passing-on through their broadcasting activities. On the other hand, the way broadcasters perceive these memories has changed over time. It was concluded that broadcasters communicated with the community who experienced the disaster by constructing and reconstructing memories through their programs and activities. The study also revealed that the practices of community broadcasters pass on the culture of disaster by (1) passing down stories, (2) serving as a way to pass on messages to the next generation, and (3) updating the memories of disasters. From the perspective of the post-disaster and inter-disaster periods, this study makes visible the fact that the broadcasters are transmitting the changing memories of disaster and suggests that, after a disaster occurs, it is important to position community broadcasting as post-disaster broadcasting rather than as normal broadcasting.

1　はじめに

2011年３月11日に巨大地震と津波が日本の東北地方を襲った。福島第一原子力発電所の原子炉が直撃され，未曾有の災害が引き起こされた。東日本大震災と福島第一原発事故による複合災害は，原子力発電所のリスクを現実のものとして国内外に突きつけた。震災から９年余が過ぎ，ほとんどの避難場所は廃止され，メディアはそれを東日本大震災の復興の終焉として描いた。災害報道の急速な減少が記憶の風化を加速させるとも指摘される（原・大高，2019）。

災害の記憶や記録をアーカイブし，それらを集合的な記憶として将来に継承することは，リスク社会と呼ばれる現代が備えるべきレジリエンスであり，日本の重要な社会的課題である。東日本大震災以降，メディアによって過去の災害記憶が現在の災害体験にどのように接続され，また，未来の災害に向けてどのように継承されるかについての研究が必要とされる（林，2013；饒辺・田中，2013）。

地震，津波，台風など自然災害とともにその歴史を歩んできた日本社会では，これまで将来の災害に向けた防災が重視され，さまざまな対策が講じられてきた。近年では社会をこのような災害前だけではなく，災害が繰り返されるものとする，「災後」（御厨，2014），あるいは「災間」（仁平，2012）と捉え，災後・災間の社会で人々にメディアが何をどのように伝える必要があるかという視点が重要との指摘がある（水出，2019）。これは，新聞・テレビなどマスメディアだけでなく，ローカルやコミュニティのメディアにとっても同様である。防災や災害時に役立つメディアの一つであるコミュニティ放送も例外ではなく，繰り返される災後や災間に，地域の災害の記憶や記録をいかに地域コミュニティの人々に継承しているか，コミュニティメディアの意識と実践への理解・研究が求められている。

本研究では，先に示した視点をもとに，災後・災間にコミュニティ放送がどのように災害の記憶を継承しているかについて明らかにすることを目的とする。これまでの災害発生から復興までの一連の流れに，災後・災間という視点を新たに加えることで，災害が重層的に起こる今日のリスク社会におけるコミュニティ放送の役割を，災害文化の継承の側面から再考することを試みる。

2　災害の記憶とコミュニティ放送

2.1　コミュニティ放送の災害に関する先行研究

コミュニティ放送制度が施行された３年後の1995年，阪神淡路大震災が発生した。この経験は，コミュニティ放送の災害時におけるメディアとしての重要性や有用性を社会に認識させる契機となった。以降，大きな災害後にコミュニティ放送局の開局が増加する傾向が続き，防災はコミュニティ放送局にとって主要な目的となっている（宮田，2017；金山，2017；村上，2017）。総務省は，東日本大震災以降，コミュニティ放送を災害時の有効なツールと位置付けている。国土強靭化政策や自治体の防災に向けた衛星通信，IP告知システム，緊急メール，CATV，防災無線など，多重化されたメディアのシステムでは，地域住民に災害情報を伝達するラストマイルメディアと位置づけられている。

コミュニティ放送の災害時の役割として，防災や復旧復興に関する情報伝達が重要視されてきた。日常的な防災意識の啓発や防災訓練，自治体や関係機関と連携しながら災害発生直前の警報・避難勧告を行ない，災害発生時には災害状況や避難場所の情報伝達を24時間体制で行なう。事態に応じ，臨時災害放送局として機能する場合もある。災害の経過とともに，住民安否やライフライン，救援支援情報，支援物資の配給，経済支援情報など，木目細かな情報がコミュニティに伝達されており，災害時におけるコミュニティ放送の有

用性は社会的評価を得ている（金山，2007；金山，2017； 市 村，2012； 北 郷，2013； 村 上，2012）。

音声メディアとしての特性やコミュニティメディアの役割を活かし，被災者たちの慰めや心の拠りどころになるという役割意義も存在する（金山，2007）。東日本大震災では復興の長期化に伴い，物心両面の喪失で傷ついた人たちの心のケアを意識する番組を放送したり（粟屋・遠藤・平石，2014），長期の避難生活を送る被災者たちに交流の場を提供したり，さらに離散した地域のアイデンティティを維持するなど，被災住民たちと共に地域コミュニティの復興に寄り添うメディアのあり様が報告された（災害とコミュニティラジオ研究会，2014；大内，2018）。米倉（2016）は，地域メディアが「被災地・被災者の声に耳を傾け，その代弁者たろうとする『善き隣人』『地域の伴走者』」（p.54）だとして，一方的な情報伝達者ではなく，コミュニティとのコミュニケーションをもとに，何を伝えていくのかを日々判断する存在だとする。

発災から復興という一連の過程におけるコミュニティ放送の役割については，災害情報論や地域メディア論の視座に立脚した調査研究が行なわれてきた（寺田，2017）。しかし，復興後にコミュニティ放送がどのように災害経験を伝達し，その記憶を継承しているかという災害文化の視座については，これまで焦点があてられなかった。未曾有の複合災害である東日本大震災以降の社会を考えるにあたり，御厨（2014）は「災後」という視点を提示し，一方，仁平（2012）は「我々は<以後>ではなく<間>を生きている」として，東日本大震災後の社会を「災間」とよび，災害後の日常時を災害と災害の間と位置づけた。これは，繰り返し起こる災害に耐えうるレジリエンスな社会を構想した所以でもある。広瀬（2004）は災害文化を次のように定義する。

> 災害文化とは，幾世代にもわたる社会や家族，個人の災害経験が，社会の仕組みや人びとの生活のなかに反映されて，社会の暗黙の規範や人びとの態度や行動，ものの考えかたなどのなかに定着する様式である。（p.98）

水出（2019）は，重層的な災後社会においてメディアがどのように災害を記録してきたかという視野に基づく研究が必要と指摘するが，それは災害文化の醸成と継承にメディアがいかに寄与できるかという問いでもある。

この視野に立てば，災害発生から復興まで長期に亘って被災地や被災住民の様子や声を直接番組で伝えるコミュニティ放送は，災害の記録や記憶を保有することに貢献している。被災を経験した局関係者・スタッフが，これらの貴重な災害の記録や記憶を災後にどのようにして地域コミュニティに伝えているか，また，それはいかに災害文化の醸成に貢献しているかについては，これまで地域メディア研究との関係ではほとんど焦点があてられておらず，その調査研究は急務であるといえよう。

2.2　災害の集合的記憶と災害文化

災害に関する生活知識やコミュニティの知識は，後に同様のリスクを回避するため，ある世代から次の世代へと継承されており，集合的記憶はコミュニティのレジリエンスに役立つ（奈良，2018; Pfister, 2009; Raphael, 1995）。関連して，Halbwachs（2015）は集合的記憶を以下のように定義している。

> 集合的記憶とは，内部からみられた集団のことであり，しかもその期間は，人間の生命のふつうの長さを越えることはなく，多くの場合，それよりはるかに短いのである。集合的記憶は，集団に対して，もちろん時間の中で展開される集団自身の情景を示すものである。というのは，

問題は過去に関することだからなのである。しかもそれを，集団がいつもその継起するイメージの中に自己を認めることができるような仕方で示すのである。(p.98)

Zelizer(1992）は，「過去の物語はメディアが記憶することを選んだ物語であり，メディアの記憶がどのように私たち自身のものになったかという物語でもある」(p.214)と指摘した上で，メディアがコミュニティの集合的な記憶の中で過去を解釈するツールの機能を果たすと述べている（Zelizer, 2001)。地域に視線を向けて，地域の記憶を共有することは，地域アイデンティティの再構築・強化につながり（福田，2005)，個人的な物語を共有することは経験者と未経験者の回路となる（阿部，2005)。被災者の声を聴き，それを伝える活動を通して，個人的なストーリーを蓄積してきたコミュニティ放送局は，放送を通じて地域コミュニティにおける災害の集合的記憶の継承に貢献する可能性がある。

近年の集合的記憶を理論基盤とするメディア記憶研究分野では，地域メディアによる集合的記憶に関連する研究は少なく，テレビや新聞と比べればラジオ研究はさらに限定される。Neigerら（2011）は，地域にテレビがない場合，地域ラジオが特定の地域や人々のセクターを表現する唯一の声を構築することになり，メディアが集団の境界線強化とその定義に重要な役割を果たすと論じた。マスメディアとローカルメディアとの比較では，同じ記憶について報道するにしても，集合的記憶が異なることも報告されている（Neiger, Meyers, & Zandberg, 2011)。

Atsumiら（2016）は，岩手県野田村でのアクションリサーチを基に，コミュニティラジオが震災の記憶を想起するツールとなると報告した。また，金山（2019）は，阪神・淡路大震災以降，神戸市長田区で長期に亘り継続されたコミュニティラジオのメディア･イベントの観察から，「接触による震災の想起」「集合的記憶の世代横断」「被災コミュニティ間のつながり」「災害を経験していない地域への伝承」という４つの役割の存在について明らかにした。

次世代の人たちの集合的記憶の間接的な内在化は，継承においても重要となる。過去の災害追悼は，それを直接経験した人々にとっては慰めに，直接関与しなかった人々や将来の世代にとっては，災害から学んだ教訓を内在化させる機会となる（Seeger & Sellnow, 2019)。田中と林（1989）は，災害文化の継承の際，地域住民が災害に対する知恵を共時的に共有することと，世代間における通時的な共有の必要性の両面があるとし，流動化する現代社会では，継承の担い手としてメディアの機能に期待するとともに，災害報道による擬似体験のローカライズ化や防災教育とコミュニティの役割の意義について指摘した。

長期に亘る世代間の記憶伝達を扱ったものでは，例えば，金井ら（2007）が津波常襲地域における災害文化の世代間伝承について，若い世代の危機意識の低下や親子間での伝承機会の減少について，また飯塚ら（2018）は，全国の洪水常襲地域の災害伝承や言い伝えが，洪水対策を地域知とする災害伝承表出につながっている点を明らかにした。900年間に発生した常襲洪水地域災害を対象にした調査では，災害の記憶は生きた目撃者に依存し，その記憶は２世代で薄れることが報告された。その原因として，若い世代への情報伝搬に時間が掛かること，また若い世代が記憶することに無関心であることが指摘された（Fanta, Šálek & Sklenicka, 2019)。災害の記憶を，世代間を跨いで継承することは困難であり，災害文化の継承にかかわるメディアの貢献が一層求められている。

水出（2019）は，震災の記憶を重視する社会背景において，関東大震災の記憶再構築と伊勢湾台風の集合的記憶の忘却を新聞メディア分析から調査し，「重層的な<災後>の上に，現代的な「災後」

が存在する」(p.366) と述べた。単独の災害の記憶ではなく，複数の災害のつながりの中から災害文化が継承されるとの知見を得た上で，コミュニティ放送は，災害の記憶の継承では，他の被災地の災害文化とどのように関連づけられるかに関わる視座が改めて重要となる。

3　研究目的と調査方法

これまでの先行研究や集合的記憶に関する研究から，災後・災間においてコミュニティ放送局がどのように災害の記憶の継承を意識し，それをどのように実践するかについての調査研究が必要であることを示した。その際，災害文化の視野に立ち，次世代や災害未経験者への記憶の継承や，他の地域における災害の記憶との接続という視点が重要となる。これを踏まえ，本研究では，以下の２つの研究課題を設定した。

（1）コミュニティ放送局は，災害の記憶の継承をどのように意識し，実践しているのか。
（2）長期化そして重層化していく災後のコミュニティ放送局の実践が，どのように災害文化の継承につながっているのか。

本研究では，研究課題に対して，被災地のコミュニティ放送局関係者へのインデプスインタビュー調査を実施した。対象となる災害については，コミュニティ放送法が制定された1992年以降，2018年末までに発生した災害のうち，（1）被災地でコミュニティ放送局または臨時災害放送局が放送を行なっており，（2）死傷者など被害規模が大きい，という条件に該当する７つを選定した[(1)]（表１参照)。

インタビュー対象は，選定された被災地で放送を行なっていた局とした。但し，1995年の阪神・淡路大震災では，災害発生時に兵庫県臨時災害放送局として開局し，１ヶ月半の放送後に閉局した「FM796フェニックス」のケースと，神戸市長田区で災害時の在日外国人向けに開局した２つのミニFM(FMヨボセヨとFMユーメン）が合体し，震災１年後の1996年１月17日にコミュニティ放送局として開局した「FMわいわい」のケースがあり，本研究ではFMわいわいを阪神・淡路大震災のインタビュー対象局とした。また，2000年の北海道有珠山の噴火災害では，虻田町災害FM放送局「FMレイクトピア」が開局し，11ヶ月放送後に閉局した。その後，有珠山周辺の自治体を放送エリアとしたワイラジオが2018年に開局したことから，本研究ではワイラジオも有珠山噴火災害の記憶の継承の点から調査対象とした。東日本大震災では，災害の広域性や地域間の被害格差，局の活動状況などを考慮し，岩手，宮城，福島の沿岸部地域に拠点を置いたコミュニティ放送局10局及び臨時災害放送局２局（両局とも2018年３月廃止）を対象とした。そのうち，原発事故による多くの避難者が福島市で避難生活を送っていたことから，福島市のコミュニティ放送局も対象に含めた。結果，24局を調査対象として選定した。

表１　インタビュー対象の災害とコミュニティ放送局

災害名	発生年月	県	局名	インタビューワー*1	インタビュー日	経過年数*2
阪神・淡路大震災	1995/1/17	兵庫	FMわいわい	代表理事	2018/1/17	22.7
有珠山噴火	2000/3/31	北海道	ワイラジオ*3	担当	2018/10/5	18.3
新潟県中越地震	2004/10/23	新潟	FMとおかまち	取締役放送局長	2019/9/20	14.7
			FMながおか	取締役放送局長	2019/9/20	14.7
東日本大震災 福島第一原発事故	2011/3/11	福島	FMいわき	取締役局長	2017/11/17	6.6
			FMポコ	編成放送＆アナウンサー	2018/2/13	6.8
			ひばりFM	放送ディレクター	2017/11/18	6.6
			おだがいさまラジオ	制作担当	2017/11/17	6.6
		宮城	FMいわぬま	技術主任	2018/3/28	7.0
			FMなとり	編成局長	2018/3/28	7.0
			FMしおがま	代表取締役	2018/3/28	7.0
			ラヂオ気仙沼	代表取締役	2018/3/29	7.0
			ラジオ石巻	放送局長	2018/3/29	7.0
			FMたいはく	代表取締役	2019/11/5	8.5
		岩手	FMねまらいん	放送局長	2018/5/17	7.1
			宮古FM	代表取締役、放送ディレクター(2名)	2018/5/18	7.1
熊本地震	2016/4/14	熊本	熊本シティFM	営業部長	2019/9/9	3.4
			FMやつしろ	代表取締役	2019/9/10	3.4
北海道胆振東部地震	2018/9/6	北海道	FMびゅー	代表取締役	2018/10/5	0.1
			ワイラジオ	担当	2018/10/5	0.1
			あつま災害エフエム	担当(主幹)	2018/10/6	0.1
西日本豪雨	2018/7/4	広島	FMちゅーぴー	放送局長	2019/9/3	1.1
			熊野町役場	担当	2019/9/3	1.1
		岡山	レディモモ	代表取締役	2019/9/6	1.2
			FMくらしき	専務取締役	2019/9/6	1.2

＊1　インタビュー当時の役職
＊2　災害発生日からインタビュー日までの年月数
＊3　ワイラジオは北海道胆振東部地震にもリストされている

インタビューは2017年11月から2019年９月までの間で実施した。今回は，災後の長さ（発災からインタビュー実施日）が，被災地によって１ヶ月から約23年とかなり差異があり，災後の経過

時間が記憶の継承に影響したことが予想される。そのため災害発生からインタビュー実施日までを災害からの経過年数としてデータ分析に用いた。

インタビュー対象者については，本研究の主旨を理解した上で局が指名した者とした。インタビュー調査の所要時間は60分から120分で，調査対象者の同意を得て収められた録音データは，全て文字に起こして分析を行った。

4　分析・考察

今回の調査では記憶の継承が時間経過によって影響されると予想されたことから，対象とした７つの災害は，阪神・淡路大震災の1995年を起点として５年毎で分類し[(2)]，全24局のインタビューデータ分析から抽出した概念を，期間ごとに分析した（表２参照）。以下，研究課題に沿って順に考察する。

表２　期間による災害の分類

フェーズ1	2015-2018	熊本地震，北海道胆振東部地震，西日本豪雨
フェーズ2	2011-2015	東日本大震災
フェーズ3	2001-2005	新潟県中越地震
フェーズ4	1995-2000	阪神・淡路大震災，有珠山噴火

4.1　記憶の継承への意識と実践

コミュニティ放送局が災害の記憶の継承をどのように考え，具体的にどのように実践しているかという研究課題１については，インタビューの分析から（１）災害特別番組，（２）番組アーカイブ，（３）メディア・イベント（式典），（４）メディア・イベント（自前），そして（５）記憶の新しい取組みの５つの実践が抽出された。

これら５つの実践は，調査対象のコミュニティ放送局の全体傾向として表れており，コミュニティ放送局は災害の記憶継承において意識的であり，放送やイベントを通じて災害の記憶継承がなされていたといえよう。一方，各期間をみると，局の意識や考え方，実践に違いが認められることから，以下，期間ごとに詳細をみていく。

4.1.1　フェーズ１（2015-2018）

この期間のコミュニティ放送局に関しては,「災害特別番組」が特徴的な実践として挙げられる。災害が発生した翌年，数時間の特別番組を制作・放送した局が多く，防災の日や自治体の災害訓練に合わせて特別番組を放送する局も多い。例えば，西日本豪雨に見舞われた岡山市のコミュニティ放送局レディオモモでは，６月の水防月間での市の水防訓練を生中継し，９月１日（防災の日）の市総合防災訓練でも生中継を特番として放送しており，これらの特番中で，当時の被災経験や災害対応などについて語っている。

一方，追悼式や式典に関しては，その日時が生放送と重なる場合，番組内で黙祷を放送するケースがあるが，番組として放送しない局もあった。真備町をはじめとする死者200名となる大被害に見舞われた例では，FMくらしきが追悼式を放送せず，代わりに自社の特別番組を放送しており，その理由について，以下のように説明している。

> あまり１年経ったからといって，追悼式の暗いイメージではなくて，先を見ていく内容がいいんじゃないかなということで『あしあと』というタイトルをつけて，各地区会長さんの話を聞いて，また繋いで次に移るという感じのものを３時間作った。

豪雨被害の場合，多くの死傷者があっても，地震と違って被災日時を特定しにくいことから，黙祷を含む形式の放送が難しいという指摘もあった。災害の種類や被害により，追悼式や式典など災害関連のメディア・イベントの放送の取り組みに差異がある。熊本県では，熊本市内で放送する県域ラジオとコミュニティ放送局が共同して，防災の日に特別番組を制作・放送していた。また，FMくらしきのように，災害当時の記憶だけでな

く，復興の様子を伝える番組を新たに始めた局もあった。

災害後の数年間は災害特別番組を放送し，災害経験を防災番組や新しい番組として取り上げる局が多く，また復興過程の最中にある局としては，前向きな復興状況を伝えるのが主な実践となっていた。災害からの時間経過が比較的浅い状況で，自局の災害経験を更新するために，災害時のメールやSNS(Twitter, Facebook)，原稿ファイルなどの記録を元に過去の経験を見直す姿勢もみられた。

4.1.2　フェーズ２（2011-2015）

フェーズ２に該当する東日本大震災では，政府が復興期間を2021年までの10年間と定め，初めの５年間を集中復興期間，残り５年を復興・創生期間と位置付けた（復興庁，2018）。特に沿岸部では，震災から７～８年が経過しても復興が終了しない地域が多く，また地震津波と原発事故の被害では復興状況にかなり違いがあり，災害の記録と記憶に関して複雑な構図が浮かびあがった。この期間における実践としては,「災害特別番組」「メディア・イベント（式典）」「番組アーカイブ」の３つが顕著であり，またそれぞれが関連しあっていた。

全ての局で毎年災害特別番組を放送していたが，多くは３月11日の追悼式典であり，国の追悼式[3]，地元の追悼式と黙祷（14時46分）とする構成が典型であった。毎年開催される追悼式典については,「放送すべき」と考える局が多かった。例えば，ラジオ石巻では，「3.11の追悼式がある限りは特番としてやらなきゃなって。石巻にとって特別というか，やっぱりそこは外したらいけない」と，地域メディアとしての使命と意義を取り組みの動機としていた。

局が制作・編成する災害特別番組の他に，東日本臨災ネットワークによる特別番組「ラジオから伝えたい想い～東日本大震災から８年～」[4]や，（株）ミュージックバードが制作した「KIZUNA Station」を放送する局も多かった。

震災から５年目頃から，「復興はもういい」という声がコミュニティや局内部からも聴こえるようになったと多くのインタビューイーは話していた。特別番組や復興番組を放送すべきと考える局は多いが，その実践にはかなり温度差があった。FMたいはくのように2011年から月命日に特別番組を続ける局がある一方，FMしおがまのように，番組審議委員からの希望が継続の後押しとなっている局もある。

> 毎年追悼式の中継とか，サイレンが市役所から鳴るので，そういうのを中継したりして，毎年同じことになっちゃうんだけど，これはやるべきだよって言われて。去年も臨災局の特番を審議したんですよ。そしたら去年も，忘れていたことをラジオで聴いて良かったとか，こういう節目はやんなきゃいけないんだろうなって...私たちもやらなきゃいけないのかって少し迷ったこともあったんですけど，やっぱりやらないといけないんだなって。

また，災害特別番組の内容を大幅に変えた局もある。FMポコは2018年３月11日の特別番組として地元サッカーチームのホームゲームを放送し，実況中継の中で，黙祷の時間を設けた。震災５年目までは典型的な追悼番組を放送していたが，これを６年目から変えた理由を以下のように語った。

> 自分たちが伝えたい，伝えるべきだと思ったトピックスを選んでやっていますね。なぜかというと，３月11日の震災の答えがまだ無いんです。だから答えが無いものを番組で作って発信するっていうのは，非常に終わりのない映画を見たもやもや感が強くて，だから何なのっていうのが強い。一体何を伝えたいのか，何が言いたいのかっていうのがないと，発信すべきじゃ

ない。

災害や復興関連の番組に関しては，大半の局がアーカイブ化していた。発災当初の混乱時は記録する意識も余裕もないが，すぐに記録していくべきだと考えるようになり，放送データや原稿などを記録として残し，結果として長期間に亘る膨大な番組アーカイブを保持していた。FMいわきは，福島原発事故でマスメディアが避難した状況下，唯一残ったメディアだが，３ヶ月目から意識的に全番組データと放送原稿を保存するようにしたと話していた。

アーカイブの活用に関しては，（１）次の番組の参考資料，（２）活かし方を検討，（３）記録として保管の３点が特徴で，局により差異がみられた。今後の活かし方については，具体的な考えはないが，貴重な記録としてまずは保存するという声が最も多かった。FMいわぬまの担当者は次のように述べた。

番組の音声をそのまま使うってことはないと思いますけど，例えば何か節目の時に，そういう番組，例えば10回とか10年とかそういう時に作ろうってなったら，多分その人に直接出てもらうとかってなると思うので，当時の音声を放送で使うとかはないと思います。大体それでできたツテが，今でもずっと続いていることが殆どなので。

一方，おだがいさまラジオ（富岡町）とひばりFM(南相馬市）のような臨時災害放送局でも，番組のアーカイブ化がみられた。おだがいさまラジオの担当者は以下のように話していた。

その時その時の状況が分かる。要するに今その仮設住宅がマックスになっている時代もあった時に，こんな話題があり，あんな話題がありっていったところの思いと，５年経ってからの住民の人たちの声を聴くと，多分同じ人が喋ってても全然違うこと言ってると思うんですね。今この時に必要なものが何だったのか，足りないものが何だったのか，どういう思いでいたのかっていうのは，そんなに頻繁にたくさんの人から録音してるわけではないけれど，それって何かの役に立つのかなとも思ったりもしますよね。何年後に出た時に，全く違う話が出てるっていうとこ，じゃこの５年間で何が変わったんだろうねえって。

アーカイブされた住民の生の声からこそ，当時を知ることができると考えており，それゆえ，閉局された後に番組アーカイブがどのように使われていくか，あるいは保管されていくかが決まっていないことに対して，不安を抱いていた。

臨時災害放送局からコミュニティ放送局へと移行した局でも，引き継がれた震災番組アーカイブが廃棄される可能性はある。FMなとりでは，臨時災害放送局当時のスタッフが殆どいなくなり，震災番組アーカイブの保存をどうするのか検討していた。

今はすごく綺麗にアーカイブデータあるんです。でも今まで一回たりともそれに触れたことがないです…この名取の音風景とか，波の音とかですね。そういったものを事業者はちゃんととっておいてくださいというのが県域放送局だと義務付けられているんです。我々はコミュニティ放送局なので義務付けられていないです。じゃどうしようか。私の基本的な考えは，同録は３ヶ月とっておかないといけないんですよ，それは機械にやらせてるんで，それ以外は削除しようかなと思ってるんです。ただ臨時災害局の一番最初のところのデータはとっておいてもいいのかなと。データなので，何TBの箱に全部入るんでとっておこうかなと，あと紙は全部捨てようかなと。

復興が長期化する中，災害特別番組や災害関連番組のアーカイブなど震災の記憶の継承に関して，各局の考え方や実践は違いがあり，時間経過に伴い，その差異は拡大していることが分かる。

4.1.3　フェーズ３（2001-2005）

2004年の新潟県中越地震では，死者60名以上，負傷者4800名以上，避難者10万人以上と大きな被害をだした。崩れた土砂から２歳男児を救う92時間の救出劇は連日テレビで放送され，孤立した山古志村で飼い主と子犬を励ました母犬マリの物語が映画化された。メディアで大きく報道された新潟県中越地震も，震災から10年を過ぎ，コミュニティ放送局では災害特別番組とは別に，新しい取り組みを始めており，「記憶の新しい取組み」が共通する実践として抽出された。

FMとおかまちは，中越地震の時に開設された臨時災害放送局を契機として開局され，震災10年目には，10時間の特別番組を制作し，臨時災害放送局の当時スタッフや市民らに10年間の変化などを取材し放送している。そして，この特別番組をきっかけとして，新しい取り組みを始めた。

特番の中に，確か10年前に生まれた子供達にも話を聞いたんですね。要するに中越地震の年に生まれた子とか2004年に赤ちゃんを育てようとしてた方とか。子供達はもちろん知らないわけですよ。そういう方たちにこの番組に出てもらって，その時にお母さんこう思っていたんだとかを知ってもらって，この記憶を忘れないってことをやっていくのは，我々FMとおかまちのアイデンティティのようなものなので。この中越地震は定期的にやらなきゃいけない思いは強くなりました。今年が15年になるので，あまり大きな特番ではないんですけど，中越地震が発生した10月23日あたりの２週間くらいをもう一回15年ということで，防災意識をしっかりしようというキャンペーンをやろうと思っています。

FMながおかも，2016年から新番組「建ちあがれタウンクリエーター　まちくり！」を放送開始した。新潟県とFMながおかによる共同企画で，工事現場の取材を通して若者の土木建設業界への関心を高めることが目的である。番組では，建設業従事者が中越地震当時にどのような活動をしていたかについて訊ねている。番組はポッドキャストでも配信されており，ネットでも聴くことが可能である。

今までの番組の内容では，その時に専門学校で勉強していて，地震をきっかけにやっぱりこの業界に行こうと決めた人がいるとか，入社して１年目の時に中越地震があって，まだ入社したばかりで右も左もわからない中で，とりあえず復旧工事で山古志に連れて行かれたという人とか。つい最近だと，例えば避難所が開設された時に各避難所に仮設トイレを運搬していましたとか。あとずっとマンホールの蓋を開けて回ったと。全部蓋開けて回って，そのマンホール・下水道関係の工事を一晩中やっていたと。そういう建設業の，当時まだ若いですよね，中越地震の時に携わった人のインタビュー。(FMながおか)

これらの新しい取組みや番組は，ある時間経過を伴う中で改めて発見された震災の記憶であり，それを若い世代へ新しいスタイルで伝えることに，新たな意義を局自体が見出していることが分かる。

4.1.4　フェーズ４（1995-2000）

1995年阪神・淡路大震災と2000年有珠山噴火は，ともに幾つもの節目を超えてきた災害と位置づけられる。

1996年１月17日に開局したFMわいわいは，

2016年３月まではコミュニティ放送局，2016年４月からはネット放送局として，通算25年以上放送を続けており，長期に亘って震災記憶を継承してきたコミュニティのラジオ局である。FMわいわいの放送や活動で最も特徴的なのは,「メディア・イベント（自前)」であろう。震災から数年間は大手マスメディアの震災特別番組で取材される側だったが，マスメディア目線の捉え方に違和感をもち，FMわいわいの市民番組制作者たちと共同で,「1.17KOBEに灯りをinながた」を立ち上げた。1999年から毎年１月17日に，新長田駅前広場でイベントを開催，終日ライブや中継を行なってきた。

> 番組の構成は12時に始めて消灯までということで，夜の10時だった。今は８時には終わっている。実行委員はそれぞれの部所が決まっていて，放送に関してはFMわいわいで決める。会場でのゲストは呼んでない。自分で来たいっていう人しか出していない。自分たちでオファーがあった人たちだけ。鷹取中学校も有志がやり始めてずっとやっている。17時から中学生のメッセージがあって，17時46分から１分間黙祷して，その後和太鼓。17時から18時半くらいまでは会場からの音を流すというのをやって，その後からは（キャンドル）点灯。点灯だけしてるんじゃなくて，今年はこういうメッセージ，外国人のもの，障害者とか，各地からきてますとか，ゲストコーナーとか，18時半から22時までいろんなコーナーを入れて。前半のところは，12時から結構生をやっていて…あとは，収録番組も取材を取ってきて，それを間に入れる。

災害特別番組を放送しているコミュニティ放送局の中でも，FMわいわいのように自主イベントを長期間継続している局は極めて少ない。詳細は後述するが，実行委員会を中心に住民ボランティアで運営する「1.17KOBEに灯りをinながた」は，震災の記憶を次世代へと継承する重要な機会となっている。

一方，ワイラジオは，東日本大震災の経験から，西胆振地域にコミュニティ放送局を望む声が伊達市や洞爺湖町などを中心とする自治体からあがり，室蘭市のFMびゅーが共同制作する形態で2016年に開局した。ワイラジオは，「記憶の新しい取組み」として特徴付けられるが，その典型が番組「ジオパーク・火山の恵み」である。洞爺湖有珠山ジオパークの火山マスターがパーソナリティを務めるこの番組では，火山との共生，噴火の歴史，災害遺構など有珠山に関するさまざまな情報を伝えている。FMびゅーの代表が話すように，災害未経験者にとって，火山文化の一環として噴火という災害に関心をもつ機会となっている。

> やっぱりそのときの経験を忘れないための放送を荒町さん（パーソナリティ）はしてくれているので，リアルタイムな出来事とかもありますけど,その時を知らなくても,僕普通にサラリーマンしていた時なのでラジオも全く興味なかったので，全然知らなかったようなことをイメージできるくらい鮮明に話してくれたりするんで，凄く大事な番組だと思いますね。

FMわいわいやワイラジオのように，多様な情報や話題，トークやパフォーマンスなどに災害の記憶を織り込みながら伝える形態は，若い世代や災害未経験者の関心を喚起する一つの在り方といえよう。

コミュニティ放送局の災害の記憶の継承について，各局の考えとそれを反映する取り組み実践について分析を交えて考察したが，コミュニティラジオとして何をどのように今のコミュニティに伝えるべきか，コミュニティの声にどう寄り添っていくべきかという判断こそが，災害記憶の継承に影響すると理解される。また，災害の継承となる

番組数の減少というより，時間経過により災害の記憶への捉え方が変わり，新たにみえてくる震災の記憶もあって，それを新しい実践として展開する様子も浮かび上がった。災害の記憶は，時間の経過とともに番組や活動の中で構築・再構築されながら，その時々のコミュニティに向けて伝えられてきたことが分かる。

4.2　長期における継承の意味

災害の記憶の経年化や災害の重層化という変化の中で，コミュニティ放送の実践がどのように災害文化の継承につながっていくかという研究課題２については，災害から時間が経過している局ほど，長期での記憶継承が難しく，これを補うように新しい実践が必要との指摘があった。ここでは，インタビューデータの分析から，（１）語り継ぎ，（２）次世代への伝え方，（３）災害の記憶のアップデートの三点についてみていく。

4.2.1 語り継ぎ

災害を語り継ぐことに関しては，主に二つの意味が示された。第一に，災害を忘れてしまう人のための語り継ぎであり，被災した人たちの情報（経験）を更新するための語り継ぎである。

> 強みっていうのは，地域の防災に関して細かく知ってるっていうことじゃないですかね。だから辛いから忘れましょうっていうのではダメな気がするんだけどね。忘れないように何回も言うと。「こんなことありましたね」って。番組の中で，例えば何年何ヶ月経ちましたねとか皆言うからね。やっぱそうやって忘れないで，防災を気をつけて，災害がきたら今度こそ逃げましょうってことを喚起しておくことも仕事の一つだと思うんですよね。（ラヂオ気仙沼）

> 情報の更新をして欲しいってことと，もしかしたら明日また何か起きるかもしれない。だから，震災から７年ではなくて，震災の前かもしれない。それは他人事じゃないんだよっていうこと。（FMポコ）

> イベントとして10年経った20年経ったっていうのはいいけども，日々の防災には節目はなく毎日の積み重ねで15年になっていますと，言っている。（FMながおか）

コミュニティ放送の実践に，コミュニティの人たちの災害の記憶が忘却へと向かわないようにすること，そして，災害の記憶をある時点で止めずに，そこから次の災害まで更新し続けていくという二つの意味があることが示唆される。

第二に，過去の災害と現在起きていることの語り継ぎである。例えば，FMたいはくの代表は2019年10月の台風19号と東日本大震災の関係について次のように語っていた。

> 今回ね，台風でものすごい被害がありましたね。あれって，311とどう結びつくかっていうと，宮城県の丸森なんかは原発事故の問題で放射線量がカッと上がっているんですよ。山とかは除染とかできないんです。山が崩れたら放射線を含んだ土が，もうほんとにすごい崩れてるんですよ。今度は内部被曝の問題がでてくるんですよ。本当に酷いです。だから幾らでもあるんです。全部繋がるんですよ。

FMたいはくでは2011年以降，月命日に震災特別番組を放送し，さらに「3.11から」というレギュラー番組（週一回）を継続しているが，長期間の継続を通して，復興後に起きる地域のさまざまな課題や問題が東日本大震災と繋がっていることが見えてくると話していた。

阪神・淡路大震災の記憶を長期に渡って伝え続けているFMわいわいの放送局長も，「今がなぜこうなっているのか」を知るために継承が必要であ

り，「25年経たないと分からないことを伝えていきたい」と強調していた。25年前の震災から見てきたものを伝え続けた結果，25年目に何が起きているのかの意味を相対的に理解するのである。ラジオで語り継ぐことを通して，過去と現在，そして未来が繋がっていることを可視化する営みである。

4.2.2　次世代への伝え方

若い世代にいかに災害の記憶を伝えていくかは重要な課題であり，災害から10年以上経過している局が指摘していた。FMとおかまちの放送局長は，「風化ではなくムードが違う」との表現で，新しい伝え方の必要性を模索しており，若者に関心の高いアウトドアと災害を絡めた伝え方に収斂してゆくとの考えを示していた。

> 災害って怖いよねとかそういうのを言うんじゃなくて，例えばNHKとかでも，キャンプで災害とかありますよね，ああいう自然な感じで若い人たち，あんまり災害を，特に十日町だと経験していない人も増えてきたので，ああいうポップな感じで自然に災害の知識とか災害の時に対応できる技術とかが伝わるような何か，放送じゃなくてもイベントでもしたいなと思っているんですけど…アウトドア用品がいっぱいあって，こういう時にこうやったら逃げられます，みたいな。そういう自然な感じで，防災のアイデンティティを引き継ぎつつも，もっとポップに広がるような事業をやりたい。

既に述べたように，FMながおかやFMとおかまちが，震災当時に生まれた子どもや母親たちの今を取り上げたり，あるいは当時建設現場で復興に貢献した若者が成長した建設業界に焦点をあてたりする番組は，若い世代への関心を喚起させる新しい取組みであった。

阪神・淡路大震災の記憶を継承する「1.17KOBEに灯りをinながた」という儀礼的なイベントは，震災の記憶を継承するだけでなく，イベントそのものが子どもの成長と共に記憶となっていた。例えば，イベントで使うキャンドル作りはその一つであった。

> ろうそく集めを，教会とか仏教会，ろうそく屋さん，いろんなところに呼びかけをだして，いろんな所でろうそくを集めて，その後，保育園，幼稚園，小学校中学校に「ろうそく作りをしますか」の公募をだして，やりたいというところに行って，そこでやる。21年やっているとね，「幼稚園の時やりました」という中学の先生に会うとかね。これがいいローテーションになっているというか。幼稚園に行くと，２歳３歳児から６歳児の子がいるんだけどね，５歳児の子が「これ117の時に使うろうそくやで」って２歳児の子に言うのね。毎年そこの幼稚園でやっているからね。語り継ぎが自然にいっているというのと，このろうそくは何のために作ってもらうのかっていうのを，幼稚園は写真紙芝居みたいな感じでやってる。実行委員会がやるの，これがそうなんだよって言うので。小学校は毎年４年とか決まってるのね,「自分も何年になったら作る」「来年になったらやる」とか「新長田に行ったらやる」って語り継がれている。

次世代への新しい伝え方は，局の経営とも関係する。局の経営者やスタッフ，そして地元支援者たちの高齢化という問題を抱える局も多く，局の若返りや若い世代向けたコンテンツ作りが課題であり，それは災害の記憶継承とも関わってくる。例えば，役員やスポンサーに地元の名士が多いFMとおかまちでは，以下のような危機感をもっていた。

> そういった人たちもまた一気にスポンサーごと高齢化するので，そういった先人たちほど我々

は強いコネクションとか人脈を作れてないので，それは不安ですよね。だからやっぱり新しいことを新しい世代の人たちと色々やっていかないといけないっていう危機感はもってますね…新しい防災の伝え方とか広め方っていうのもきっとある。

FMながおかでも，「放送内容もかなり年齢の高い人たち向けの放送になってきているので，そこは苦しいところ，悩まなければいけないところ」と若い人たちへのアプローチに苦労していた。このように，災害文化を次世代へと継承することは，伝える内容や方法だけでなく，継承する人たちやメディアの世代交代とともに変わってゆかなければならないことを示唆している。

4.2.3 災害の記憶のアップデート

災害の記憶の継承において，過去の災害の教訓を繰り返しなぞるより，新しい災害の教訓としてアップデートしていくことが必要との指摘が複数あった。例えば，FMながおかの放送局長は次のように語った。

例えば東日本大震災もそうなんだけども，ここではこういうことがあったからうちはこうしようという風に，他の災害の教訓を活かせるようにしていかないと，自分たちの災害の教訓だけでこれから15年20年って，引っ張っていけないんじゃないかなって思うんですよね…やっぱり１回経験しているか，していないかでは全く違うんじゃないですか，取り組み方とか取り入れ方とか。だから他の災害で起きたこととかの教訓を取り入れやすいのも，経験がある地域じゃないかと。15年前のことを思い出せって言われてもね，あの時こうだったけどさってなる可能性もあるから，それを元にアップデートして，そのアップデートをするのは自分たちではない所で起きた災害の方が，ラジオでもそっちの方が伝わると思っています。

熊本シティFMでも東日本大震災を日本全体が経験したことを経て熊本地震を経験したことで，聴いている人たちの状況が変わっていると話していた。災害経験があるからこそ，自分たちの教訓を新しい災害の教訓で更新することが可能であり，それは災害文化の更新ともなる。

実際，多くのコミュニティ放送局では，例えば東日本大震災被災地のコミュニティ放送局や臨時災害局のスタッフへの電話インタビューや地元イベントへの出演など，異なる被災地の局が繋がることで互いに災害の記憶の更新を行なっていた。FMわいわいは，中越地震，東日本大震災，熊本地震など国内だけでなく，台湾やインドネシアなど海外の被災地の関係者とも繋がり，イベントでもその繋がりを活かしていた。まさに，全国に存在するコミュニティラジオのネットワークと，音声メディアの繋がりやすさを活かした災害文化の継承といえよう。

5　おわりに

本研究では，コミュニティ放送局が災後どのように災害の記憶を意識し，その継承をどのように実践しているか，また，その実践がどのように災害文化の継承につながっているのか，これまで大規模災害を経験したコミュニティ放送局へのインタビューから考察した。

調査から，コミュニティ放送局は発災時から災害の記憶に対しては意識的であり，災後における多様な記憶の継承の実践を行なっていることが明らかになった。各局の実践や内容は，時間の経過とともに変容するが，それは記憶の風化ではなく，コミュニティの変容に伴う伝え方の変容であり，その時々のコミュニティに向けて災害の集合的記憶をどのように伝えていくべきかという意識の下で，試行錯誤している様子が浮かびあがった。

本研究では，発災から復興という一連の過程に災後を加え，コミュニティ放送の災害時における情報伝達の役割に災害の記憶の継承を合わせることで，発災から災後まで長期に亘るコミュニティ放送の役割の再考を試みた（図１参照のこと）。

災害文化の継承においては，災害に対する知恵を共時的に共有することと世代間における通時的な共有が必要とされるが，コミュニティ放送局はその両方における役目の一端を担っているといえよう。Raphael（1995）は，災害への対応の仕方や将来への備え方など，その集団の精神的傾向としての災害サブカルチャー[(5)]は災間に発達し，影響力をもつようになることが多いと指摘している。複数のコミュニティ放送局の実践で観察されたように，コミュニティ放送による災害の記憶の継承実践は，地域コミュニティの災害サブカルチャーの発達にも影響・波及していく可能性があるだろう。

最後に，コミュニティ放送による災害の記憶継承に関して，より長期的な調査と，地域コミュニティが集合的記憶をどのように受容しているかについてのオーディエンス研究が今後の研究課題として必要であることを指摘しておきたい。

謝辞

本研究にご協力頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。本研究はJSPS科研費JP17K04139の助成を受けたものです。

注

（１）防災科学技術研究所「災害でふりかえる平成―国内の主な自然災害と社会の動き」や日本赤十字社「平成30年間の大災害」も参考にした。

（２）2006年から2010年に関しては，選定された災害は該当しておらず，分析から外した。

（３）2012年から毎年３月11日に東京都内で開催されている政府主催の追悼式は震災10年を節目に打ち切られる予定。

（４）東日本臨災FMネットワークは東日本大震災被災地のコミュニティ放送局や臨時災害FM局など11局が加盟。毎年３月11日にネットワークで制作した特別番組が全国のコミュニティ放送局で放送された。2019年３月放送で終了。

（５）「災害の脅威と衝撃の繰り返しに反応して生まれた目的観，価値観，規範，組織，技術などの複合的集合」と定義されている（p.66）。

参考文献

阿部安成（2005）「記憶から歴史へ／歴史から記憶へ」矢野敬一・野上元・阿部安成・木下直之・福田珠己編『浮遊する「記憶」』青弓社，pp.151-204.

Atsumi,T.,Ishizuka,Y., and Miyamae, R. (2016) “Collective Tools for Disaster Recovery from

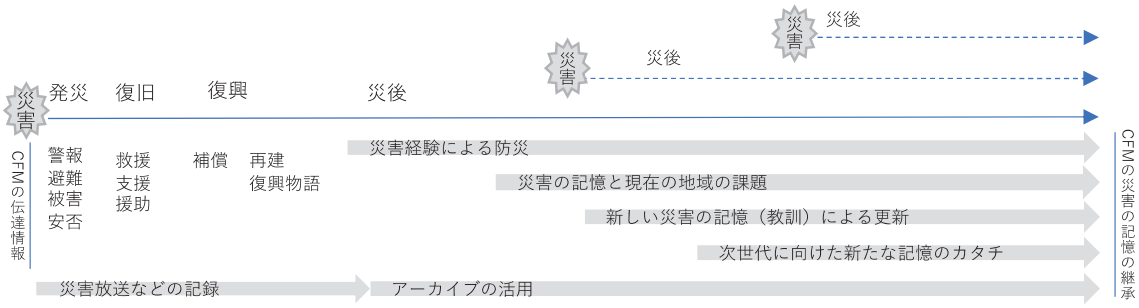

図１　コミュニティ放送による発災から災後の役割

the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Recalling Community Pride and Memory through Community Radio and “Picturescue” in Noda Village, Iwate Prefecture” *Journal of Integrated Disaster Risk Management*, 6(2), pp.47-57.

粟屋佳司・遠藤保子・平石貴士（2014）「震災復興における表現文化とメディア—東日本大震災後の復興支援に関する福島県のコミュニティFMにおける音楽の契機とミュージカル『葉っぱのフレディー』上演の事例について—」『立命館産業社會論集』49(4), pp.101-118.

Fanta,V., Šálek, M., and Sklenicka, P.（2019）How long do floods throughout the millennium remain in the collective memory? *Nature Communication* 10, pp.4-5.

復興庁（2018）「東日本大震災からの復興の状況と取り組み」<https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat7/sub-cat7-2/201801_Pamphlet_fukko-jokyo-torikumi.pdf> Accessed 2020, March 1.

福田珠巳（2005）「地域の記憶——異質性と均質性の間で」，矢野敬一・野上元・阿部安成・木下直之・福田珠己編『浮遊する「記憶」』，青弓社，pp.119-150.

Halbwachs, M.（1989）*On Collective Memory*, University of Chicago Press.（小関藤一郎訳, 2015,『集合的記憶』行路社）.

原由美子・大高崇（2019）「3.11はいかに語り継がれるか—東日本大震災後７年・テレビ報道の検証—」『NHK放送研究所年鑑2019』pp.67-129.

林香里（2013）「震災後のメディア研究，ジャーナリズム研究　問われる「臨床の知」の倫理と実践のあり方」『マス･コミュニケーション研究』82, pp.7-8.

広瀬弘忠（2004）『人はなぜ逃げおくれるのか—災害の心理学』集英社新書.

市村元（2012）東日本大震災後27局誕生した「臨時災害放送局」の現状と課題『日本の地域社会とメディア』pp.115-146.

飯塚智哉・畔柳昭雄・菅原遼（2018）「洪水常襲地域に見られる災害文化としての言い伝え・災害伝承に関する調査研究」『都市計画論文集』53(2), pp.108-115.

金井昌信，片田敏孝，阿部広明（2007）「津波常襲地域における災害文化の世代間伝承の実態とその再生への提案」『土木計画学研究・論文集』24(2), pp.251-262.

金山智子（2007）『コミュニティ・メディア–コミュニティＦＭが地域をつなぐ』慶應義塾大学出版会.

金山智子（2017）「第１章制度的プレッシャーの視座からみる防災の役割」松浦さと子編『日本のコミュニティ放送—理想と現実の間で』晃洋書房，pp.2-17.

金山智子（2019）震災の集合的記憶と地域のメディア・イベント–阪神・淡路大震災の事例から–『第５回震災問題研究交流会研究報告書』pp.28-34.

北郷裕美（2013）「災害時メディアとしてラジオが果たす役割 試論 —コミュニティ放送の事例を中心に—」札幌大谷大学社会学部論１，pp.231-260.

御厨貴（2014）「序『「災後」の文明』のリアリティを求めて」震災後の日本に関する研究会編『「災後」の文明』阪急コミュニケーションズ，pp.7-18.

宮田尚子（2017）「第２章全国調査の結果から—コミュニティ放送はこうして放送されてきた—」松浦さと子編『日本のコミュニティ放送—理想と現実の間で』晃洋書房，pp.18-31.

水出幸輝（2019）『〈災後〉の記憶史』人文書院.

村上圭子（2012）．ポスト東日本大震災の市町村における災害情報伝達システムを展望する：臨時災害放送局の長期化と避難情報伝達手段の多

様化を踏まえて『放送研究と調査』62(3), pp.32-59.

村上圭子（2017）「災害時における自治体によるメディアデザインの重要性～臨時災害局を中心」<https://www.slideshare.net/keikomurakami56/ss-71861048> Accessed 2020, March 1.

奈良由美子（2018）「災害への対応と暮らしのレジリエンス」奈良由美子・稲村哲也編『レジリエンスの諸相―人類史的視点からの挑戦』放送大学教育振興会　pp.209-227.

Neiger, M., Meyers, O., & Zandberg, E.（2011）*On Media Memory: Collective Memory in a New Media Age*. London: Palgrave Macmillan.

仁平典宏（2012）「災間の思考　繰り返す3.11の日付のために」赤坂憲雄・小熊英二編『辺境から始める　東京／東北論』明石書店 122p.

大内斎之（2018）『臨時災害放送局というメディア』青弓社.

Pfister, C.（2009）The 'Disaster Gap' of the 20th century and the loss of traditional disaster memory. *GAIA*, 18, pp.239-246.

Raphael, B.（1986）*When Disaster Strikes--How individuals and communities cope with catastrophe*, Basic Books.（石丸正訳，1995,『災害の襲うとき カタストロフィの精神医学』みすず書房）.

災害とコミュニティラジオ研究会編（2014）『小さなラジオ局とコミュニティの再生―3.11から 962日の記録』大隅書店.

Seeger, M.W. and Sellnow, T.L.（2019）*Communication in Times of Trouble*, Malden, MA: John Wiley & Sons.

田中重好・林春男（1989）「災害文化論序説」『社会科学討究』35(1), pp.145-171.

寺田征也（2017）「第11章コミュニティ放送局はいかに調べられ，語られているか―3.11後の研究動向―」松浦さと子編『日本のコミュニティ放送―理想と現実の間で』晃洋書房，pp.147-170.

饒辺直・田中孝宜（2013）「3.11震災アーカイブ活用の可能性～防災・減災，復興に生かすために」『放送研究と調査』July 2013, pp.21-39.

米倉律（2016）「地域メディアが伝える震災と復興―東日本大震災の被災地で活動するジャーナリスト達の５年―」『日本オーラル・ヒストリー研究』12, pp.37-59.

Zelizer, B.（1992）*Covering the Body: the Kennedy Assassination, the Media, and the Shaping of Collective Memory*, Chicago: University of Chicago Press.

Zelizer, B.（2001）Collective Memory as "Time Out": Repairing the Time-Community Link, In G.J. Shepherd & E.W. Rothenbuhler（Eds.）, *Communication and Community*（pp.181-189）. New Jersey: Lawrence Erlbaum.